を数えてみよう。 -の『赤軍史』が含む問題は根源的である。その二、三·

わるのである。 ら新しい文化と称することになるのか、といったプロブレムにかか かという問題にかかわっている。つまり、 赤軍の建設なるものは、第一に、文化の変革と継承とは何であ またこの引き継ぎによって、。新しい文化、は何を以てみずか 旧い文化を、 でいた。 なかんずく文化の技術面をどのように引き継ぐなかんずく文化の技術面をどのように引き継ぐ

のではなかったのか。ここにも、止むをえぬ、情勢とかいうものが 原則をくつがえした事例があるのではないか 旧軍が蓄積した技術インテリゲンチャであるところの旧将校をト ツキーは新軍に吸収している。それは本来拒まれてしかるべきも といった疑問。

的な問題にわれわれを曳きずり込まずには措かないだろう。 という疑問。この最後の疑問は、文化とは何であるのかという根柢 その表層をかすめるものにすぎなかったことを示すものではない さらに、赤軍建設の過程は政治革命が文化の本質に触れず、 単に カン

> ものではないのか、といった極めてアクチュアルなプロブレムにか 与えることになるだろう。 させ、そうすることによって、この。革命、の展望にひとつの柱を ルな技術者を「文化革命」の列外に温存しているという事象を想起 問はさらに中国文化大革命が、原子力学者その他の最もアクチュア シーの纂奪という「実」ではないのか、 のか。今やソ連ではデモクラシーは名だけをとどめているのではな かわる。そもそも革命はテクノクラシーを拒否しうるものであるの って引き継がれ、 いのか。今日われわれが見るものはテクノクラシーによるデモクラ 第二に、技術インテリゲンチャの登用はそののちスターリンによ 拒否しえないとすれば、革命はいったいついに誰のものである 今日のソビエト・テクノクラシー支配を準備 といった疑惑。この疑 した

ともあれ、まずトロッキー自身の主張に聞くことにしようではな

トロツキー は建軍概史と建軍途上の諸問題とを一九二二年五月二

日に総括している。 (『赤軍の路」)

接の犯罪となる。 否定的態度をとり、 って巨大な意義を有する。本問題を顧慮せず、ましてや、これに 革命の武装力の創建にかかわる問題は全世界の共産党に 人道的・平和主義的言辞を弄することは、

日に至るまでプロレタリアー 重要性についてまさに理解を欠いているのである。だからこそ今 プロレタリアートは革命的抑圧力が持つ解放的役割なるものの トは奴隷に止まったのだ。

的は二つに跨る。つまり、 割で登場するのを見た。 れわれはそのうちの多くが赤衛軍ならびに赤軍の組織者という役 隊附コミッサーその他となってそれぞれの役割を演じた。他日 国家転覆のための拠点を軍内に整えること-わが党は革命前にみずから軍事組織を持っていた。その目 十月の転覆の際、この軍事組織のメムバーは衛戍司令、部 軍隊内において革命宣伝を行うこと、 -これである。 / … わ

要なスローガンの中に戦争の停止があった。随伴的現象としては わが手に収めてしまうといったことになっていた。 で、農民は土地へとりつき、労働者は自分の組織を作り、 んだというのである。戦争はもう過去に属しているとい うわけ ほとんど完璧な無防禦ぶりを露け出していた。たたかうのはごめ な弱体ぶりが見られる。ブレスト・リトフスク講和時には革命は 戦争による疲労と戦争への嫌悪があった。ところで、革命はそれ [体が新たなる軍事上の危機を生み、それが益々拡大していった 革命は戦争の中から直接的に成長して行った。もっとも重 かくて、革命の第一期にあっては対外面における極端 工業を

> とって始点となったのであった。つまり、武器を手にして防衛せ 独軍は進撃を再開した。そしてそれが大衆の意識の深部の屈折に 大な実験が押し出されて来た。ソビエト共和国は、まるで強姦さ 手する上で助けとなった。 ン将軍の進撃はわれわれが赤軍を建設するという真剣な作業に着 は崩壊の酵母をホーヘンツォレルの軍へ持ち込んでいた。ホフマ ねばならぬと理解し出したのである。われわれの平和主義的宣言 わめてリスキーな一歩であったが、情況上そうなったのである。 って戦争はしない、と宣言し、 れるとでもいったような条約にサインすることは出来ぬ、かとい ・リトフスク時代に平和主義的な巨 軍の解散命令を発した。これはき

5 作られたものであって、不安定であてにならぬものであった。 充されて行った。われわれの新しい連隊は、旧い連隊の崩落時にずしも良質でない動揺するエレメントである浮浪者を以て――補 組織の上でもありえなかったからである。 たったいま除隊したばかりの農民を動員する可能性は政治的にも 働青年と並んで、当時すごく多数にのぼった浮浪者を以て 立って作られて行く。当然のことながら、軍は自己犠牲に出る労 キャ人ならびにこれと連合するロシャ反革命軍の手に落ちて行っ の反乱は敵味方の双方にこのことを全く明らかに暴露したのであ ス・エルやその他白系がヴォルガ河畔で惹き起したチェッコ人 しかしながら、当初われわれは強制徴募に踏み切っていない。 反革命軍のセンター 一九一八年の夏にかけて都市は次から次へとチェコスロヴァ これに抵抗するわが連隊の力はとるに足らぬものであったか サマラ市である。 軍は自由意志の原則に かれらはシムビー 必

帰した。このモメントは赤軍史上特記すべき日付けである。強い へ、つまり、クラークへ、僧職者の一部へ、旧官僚の残滓へと向脱走兵防遏闘争で、この闘争は脱走を醸し促すところの社会集団 逡巡された動員も今や広範に展開される。これを補完するものは る。 地盤がすぐさま脚下に感じられた。 八年九月十日カザンを奪取し、その翌日にはシンビールスクが復 く不安定かつ散り易い大衆を用いて常備軍が創建された。一九 て数週間のうちに必要な屈折に達することができた。かくて、脆 対し無条件服従を要求している旨警告する。アジテーション、オ の判例を以て、死の危機にある祖国がひとりひとりに対し全員に る革命的リーダーとしての意味を持ち初める。革命裁判は二、三 けられる。新編成部隊へはペトログラード、モスクワ、イ ンが行われ、党員グループが村落から村落へと遊説する。はじめ れと同時に口伝により或いは印刷物により緊迫したアジテーショ ヴォルガ地帯で労働者農民の特定年齢層動員の試みがなされてい ・教育中央機構が創設される。またこれと並行してモスクワと沿 る。はじめて党員の大量動員方式が適用され、ヴォルガ軍に政治 オ・ヴォズネセンスクその他の労働者党員が流れ込み、コミッサ 八年八月)ソビエト共和国は軍隊の発展強化に異常な努力を傾け ルスクとカザンを抑えている。ニージニーが脅かされ、 ガナイゼーション、弾圧といつた方法を組み合せることによっ がここではじめてソビエト政権を部隊内において直接に代表す 向うではモスクワ痛打の準備が進められる。この時、(一九一 小規模の党員部隊がこの動員実施遂行を確実なものにする。 ルガ諸県に危機の鋭さに見合う峻烈な体制が敷かれる。こ これはもはや最初の非力な試 ヴォル ーワノヴ

またその能力もある。――行ではない――今日以後われわれは戦っていいし、勝っていい

われわれは今、もはやトロッキーの名文の名調子に酔えぬ。彼の われわれは今、もはやトロッキーの名文の名調子に酔えぬ。だが今日では彼の文章の熱気を帯びえた。それは「彼の事実」とことがらの論理との間に革命大衆の情念がぎっしりつまっていたからである。大衆の情念が大衆自体の存在の証しとなって、トロッキーの 「事実と論理」のはざまを往還してつないでいたのである。だがそれが失せた今は「事実と論理」との間に固有の空隙が大きく口をあれが失せた今は「事実と論理」との間に固有の空隙が大きく口をあれが失せた今は「事実と論理」との間に固有の空隙が大きく口をあれが失せた今は「事実と論理」との間に固有の空隙が大きく口をあれが失せた今は「事実と論理」との間に固有の空隙が大きく口をあれが失せた今は「事実と論理」との間に固有の空隙が大きく口をあれが失せた今は「事実と論理」との間に固有の空隙が大きく口をあれが失せた今は「事実と論理」との間に固有の空隙が大きく口をあれが失せた今は「事実と論理」との間に固有の空隙が大きく口をあれが失せた今は「事実と論理」との間に固有の空隙が大きく口をあればないます。

こで何をしようとしたというのか? 彼は言う。エト共和国を無防禦にさらしたことになる。さて、トロツキーはこる。だが情況は直ちに新軍の編成を迫る。こうして講和は若いソビブレスト・リトフスク講和の直前に旧軍は崩壊し解散を命じられ

で、大衆の自然発生的内発性の復活を待つ。そしてやがてそれを崩壊に導くが、他方まだツァーの旧軍をも崩壊させた。大とれを崩壊に導くが、他方まだツァーの旧軍をも崩壊に追従だ。だから……だから、党は大衆自体の自然発生的崩壊に追従しつつ、大衆の自然発生的内発性の復活を待つ。そしてやがてそしつつ、大衆の自然発生的内発性の復活を待つ。そしてやがてそしつの兆を見るや否や、系統的な強制徴募へと移行し、大衆の軍隊の初兆を見るや否や、系統的な強制徴募へと移行し、大衆の軍隊の初兆を見るや否や、系統的な強制であるといった。

ここに見るものは、徹底した大衆蔑視と機会主義である。党は前

を不安定無定見なものとしてしりぞけるに至る。党はその原理にお 導性に依るべきものとされる。ここから、この時点から、党は大衆 勢に転じ、情勢が有利になったとなると、その積極性は党本来の指 歴史を先取りするのではなくて歴史に対して 受身 で ある姿勢に立 のだ。われわれは今やトロッキーの一語一語の軽重と陰影とを嚙み 況上そうなったのである。ということばの向う側からやがてコミ に号令するものとして、「権威」の確保を必要とし、 ということは党の責任ではなくて大衆の責任であり、そこでは党は 勢をここにみるといっていいだろう。 されている。無原則でそのときどきの『有効性』にのみ追従する姿 そのとき列外に退いてこれを傍観し、これを見殺しにすることを許 棄は、情況上そうなったのである。という指導破綻を自白する論理 にその、指導性、を発揮し初める。講和直後における指導責任の放 くだきつつ読み進まなければならぬ。 いて大衆と対峙したのである。かくてわれわれはトロツキー の上に構築されているのだ。破綻は大衆自体の責任であって、党は うかがっているのである。ところで大衆が大衆自体の手痛い犠牲に 衛として大衆を指導しているのではない。党は大衆に追尾し、機を ーに追尾して新しい官僚が輩出することをほぼ正確に予想し得る いてやがて内発性を見せ防禦に転じたとなると、党はたちどころ 情況の打撃をもっぱら大衆へ集中させる。だが大衆が自力で攻 情況が党にとって不利である 大衆の内発性 -の "情 "

れて行く。敵に分断されてはいるが依然として厖大な共和国のテ県、郡、区のソビエト機関と緊密に協調しつつ全国に亘って作ら――そうするうちにも軍事・行政機構は、地方の

る。このようにして行政の不可欠な集中が達成される。リトリーは管区に区分され、この 管 区 は 数県から成ることにな

無に帰していた。古くからわれわれが持っている組織方法を建設 命自治機関を創設しつつあった。兵士代表ソビエトの形がそれだ 基において爆破することを意味した。帝政軍隊内において指揮官 中の赤色陸軍に自動的に移そうとする試みは、赤色陸軍をその原 そこから直接に新しい戦力としての陸軍が成長したわけではまっ 当であったし不可欠のものでもあった。だが、だからといって、 を実行していた。地主・ブルジョワ指揮官を放逐してみずから革 ところで軍は戦闘をしようとしなかったのだ。軍は軍内社会革命 と、これは不可能であったし、また可能であるわけもなかった。 ていつでも更迭しうるところの指揮官を経由して軍を管理するこ 準備期における軍管理の観点から見るなら、この方法は許すべか なくて、革命的・政治的性格のものであった。戦闘中および戦闘 の選出を実施することは帝政側エージェントの復辟の可能性をあ たくない。帝政諸連隊はケレンスキー体制を経て、十月以降全く った。この組織上の政治的対策は旧軍の崩壊という観点からは正 のコミッティを経由して管理すること、コミッティに隷属してい らざるもの、 員会に従属するものであった。むろんこの方法は軍事的性格では 官群とを前面へ押し出して来ていた。この指揮官は事実上兵士委 ものであった。旧軍はすでに選出制の兵士委員会と選出制の指揮 における絶えざる軋轢、紛争といった対価を支払って達せられた 政治上の困難、組織上の困難は信じ難いほど大きかった。心理 奇妙きわまるもの、致命的なものであった。選出制 -旧軍の破摧から新軍の創設へという屈折-ーは内部

的成熟に乏しい部隊自身が、たった今召集されて来た若い農民の 動に恰好の条件を与えるということをしばしば避け難いものにし 中から指揮官を選出するということは、そのときどきの翻弄を避 ろの権力に対しての蜂起を図ったのである。 ようと図ったのである。まさにこの軍隊そのものを創設したとこ 会主義革命党員)はもっぱらソビエト政権に対し軍隊を蜂起させ のである。かくて、このこと自体によって左派のエス・エル(社 転ずべきかという問題を個々の連隊に決定させるよう呼びかけた のカオスの擬似デモクラチズムを荒唐無稽なものにまで持って行 部隊に委ねざるをえないものであったのだ。左派エス・エルはこ か、それとも防禦戦に賛成かといった問題の決定を事実上個々の を同じくすることが出来ない。このコミッティは、進撃戦に賛成 ではないのだから、同様な事情で、選出制コミッティの体制と席 ただろう。革命軍は行動の軍なのであってプロパガンダのリング けられないものとし、個々の陰謀屋とかアヴァンチュリストの策 機関と共産党が選択しチェックするところのものであった。政治 則に立って、建設されたのである。指揮幹部はソビエト政権の諸 ころのものではなかった。赤色陸軍は上から、労働階級独裁の原 あり有用でありかつ権威ある指揮官を革命軍に供給し保障すると らかじめ掃蕩するという意味であった。だが、選出制は、能力が かれらは独軍との停戦条件を守るべきか、それとも攻勢に

マンどもの独裁を蔽いかくすものとなる。パルチザン運動へのと隊以上には出ない。かれらの幼稚な、デモクラシー、は通例アタを作る能力のないものである。かれらは地方地方のパルチザン部農民というものは、かれらに委して置く場合、中央統制の軍隊

の傾斜、それは革命期農民の天性の反映である。それをきわめての傾斜、それは革命期農民の天性の反映である。それをきわめての下士官、兵士を巻き込んで行った。

では、 であってはパルチザン運動は必要十分な武器であった。我 を重団や方面軍指揮官に隷従させるという課題は、大きな困難 長を軍団や方面軍指揮官に隷従させるという課題は、大きな困難 長を軍団や方面軍指揮官に隷従させるという課題は、大きな困難 となった。それは犠牲を伴わずに解決されたとは限らないのである。 このようなた

し、外からの危機がつのるといったこと――から、幼稚な自治主心、外からの危機がつのるといったこと――から、幼稚な自治主応であった。一般大衆にとって、これは避けようもないものであった。一般大衆にとって、これは避けようもないものであった。一般大衆にとって、これは避けようもないものであった。一般大衆にとって、これは避けようもないものであった。一般大衆にとって、これは避けようもないものであった。一般大衆にとって、これは避けようもないものであった。一般大衆にとって、これは避けようもないものであった。一般大衆にとって、これは避けようもないもの健全な反性格を帯びていた。左派エス・エルとアナーキスト派にあっては、この特性として革命へ持ち込まれた。地方、県、郡、市、その成上の特性として革命へ持ち込まれた。地方、県、郡、市、その成上の特性として革命へ持ち込まれた。地方、県、郡、市、大のであった。

前提である。

が関係して、政治上の関連でもそうだが、特に軍事的関連で、ま義的傾向は、政治上の関連でもそうだが、特に軍事的関連で、ま義的傾向は、政治上の関連でもそうだが、特に軍事的関連で、ま義的傾向は、政治上の関連でもそうだが、特に軍事的関連で、ま義的傾向は、政治上の関連でもそうだが、特に軍事的関連で、ま

しい罵詈なのだ。

果してプロレタリーアートの名においてものをいう資格があるか、 ということだ。幼稚であるとか成熟しているとかいう認定は誰が誰 において示すことである。農民の幼稚なわらうべきデモクラシーを 体的に示してもらわねばならぬ。階級とは何であるかをその具象性 農民に対するプロ の名において誰のために誰に拠って何の基準に基いて行いうるもの るだろう。われわれが問うているのはその、前衛、とかいうものが からこそそこに、前衛、があるのだ、という紋切型が跳ね返って来 たプロレタリアートはそのときどこにいて、この幼稚なプロレタリ リードするものにプロレタリアー しこの際プロレタリアー トも工場の生産管理を自然発生的に直接に掌中に握るときにはもは 幼稚なデモクラシーを生きているのだといわれる。では、成熟し われわれはそれが民衆の運命にとって不可欠であるというなら、 トとどのような関係に立つものであるのか。ここで、いや、だ レタリアー トは誰と誰と誰から成るものであるかを具 トのヘゲモニーを認めてもい トがあるが、そのプロレタリアー いっただ

> ける「前衛』のプロレタリアート性の比重を見なければならぬ。そアートの比重を見なければならぬ。またプロレタリアート内部にお も巻き込んで行ったといわれるとき、その一国におけるプロレタリ ばならぬ。この『幼稚なデモクラシー』が共産党員の著しい部分を であるのか、と問うているのだ。ここでわれわれはプロレタリアー 命史の逆説を防止し圧殺することはできない。 う。われわれは革命の名において、つまり民衆の運命の名において アナーキスト側からの発言との対比において明らかにし、今は、 不可避的に移って行く過程を、トロツキーの発言と、エス・エル、 衡量すべきだろう。いずれわれわれは、レーニンの封印列車からブ プの名において行うエス・エル罵倒、アナーキスト罵倒の論証力を のうえでわれわれはトロッキーがプロレタリアートのリーダーシッ トの前衛であるといわれる党の質をその構成において計量しなけれ レスト・リトフスクの商議へ、この商議からエス・エルの弾圧へと 、五十周年、を 、記念、するのだから。 、勝利したプロレタリアー \*歴史の外へ去った。 圧倒的多数のロシャ民衆の再登場を促すだろ \* の名において、この勝利から逆算し、この勝利からバック・デ トして弁証してみたところで、過去が未来になるというロシア革

進め方はもっともっと烈しい形で行われる。 で、規律がある軍を創建するための頑強かつ不断の闘争のうちにて、規律がある軍を創建するための頑強かつ不断の闘争のうちに過ぎる。この軍は単一のセンターから補給を受け管理されるもの和国建設というプロセスの軍事部門における反映であるが、その和国建設というプロセスの軍事部門における反映であるが、その和国建設というプロセスの軍事部門におけるのである。

指揮官要員の選別と創出は多数の甚しい難事そのものといった

初期のパルチザン期が、登場させた指揮官というものであった。り、戦中に将校となった者の広い層、さらに、革命自体が、そのものであった。われわれの管轄下にあったのは旧軍幹部将校の残

旧将校でわれわれ側に残ってしまった者があった。 (むろんこのような者はその意味を感じとった新しい時代の意味を理解したか、あるいはその意味を感じとったがした者があった。(むろんこのような者はとるに足らぬ少数派がした者があった。かれらは、白軍に投じようにもそのエネルめ人風の者があった。かれらは、白軍に投じようにもそのエネルめ人風の者があった。かれらは、最極的な反革命者であるが不意をつかれわれわれ側に残ってしまった者があった。

> 世軍で与う○正蔵グス寸形内(定系は、シートボント・ときということになったのである。 ということになったのである。

た。中央集権の組織と戦略が地方地方の思いつきとか、軍事上の 拠していて、敵の後方へ随時出没するものである、等々。 挙げて機動性に立脚し、勇猛な打力とマヌーヴァーの上に立つも 的)傾向にあった者は理論上の一般化を試み、それを定式化しよ の基本原則はもはや論争の埒外にある。 に誰の目にも明らかになってしまったので、今日、赤色陸軍建設 分離主義とか、あるいは連合主義とかいうものに勝ることが迅速 いって、革命の戦術は小戦争の戦術であることが宣言されたわけ 種をすべて網羅し、基地とのかかわりを持たず、住民の共感に依 のである。革命の戦力は少人数の独立部隊であって、それは各兵 く、中央集権制の軍にもバッテンをつけなければならぬ。革命は れた。革命は、その性格に即応して、陣 地 戦 に 対してだけでな うとした。中央集権的軍隊は帝国主義的国家の軍であると宣告さ 建軍に当り≪左翼≫反対派的(実際はインテリゲンチャ・農民 国内戦の真剣な経験がこの先入主をきわめて速かに覆えし 一言で

された。だが、ここで肝要なことはコミッサーが軍内におけるソコミッサー制である。コミッサーは革命的労働者から、党員から、また一部は――初期においてだが――エス・エル左派からら、また一部は――初期においてだが――エス・エル左派からら、また一部は――初期においてだが――エス・エル左派からら、また一部は――初期においてだが――エス・エル左派からら、また一部は――初期においてだが――エス・エル左派からら、また一部は――初期においてだが――エス・エル左派からら、党員から、また一部は一番を担当された。

で立った。 一の任務は、指揮官の純軍事活動を制約せずに、また、いかなる 一の任務は、指揮官の純軍事活動を制約せずに、また、いかなる 場合といえども指揮官の権威を低めることなしに、この指揮官の 権威が革命の利益そのものにさし向けられるといったことのない ように諸条件をととのえることにあった。労働階級はこのコミッサー制にその優れた子息を渡した。数百、数千名がコミッサーの はストで強れて行ったのである。このコミッサーのなかからやが です命指揮官が少なからず出て来た。

貫して赤軍を団結させ敵軍を瓦解させて来ているが、それは何か 重要な機関としてわれわれが既に知っているコミッサーがある。 特別な技術手段とか特別な手法とかによるものではなく、このプ は世界の軍隊すべてにおいて巨きな役割を演じておるものであ るかのように描き出して見せている。プロパガンダというもの ガンダを歪め、それがボリシェヴィキの悪魔じみた発明ででもあ しかし、ヨーロッパのブルジョア・プレスは明らかにこのプロパ を軍隊に附設するという必要に直面している。この作業のための を先んじて進められて来たものだが、今やそれは広範な政治機構 軍事建設を含むところのわが諸建設の途上、政治作業は他に一歩 剽窃する心配は何らないというわけで…… る。われわれはこの軍事機密を公然と口外しよう。敵側がこれを ロパガンダの内容を成すところのコムニズム思想によるのであ もはるかに強大で、技術的に豊富である。わがプロパガンダは一 ブルジョア・プロパガンダの政治機構はわれわれのものより 赤軍におけるプロパガンダの役割は一般に知られている。

た派エス・エルのモスクワ蜂起』等々といつたデティールであるだいだろう。赤軍建設にかかわる主たるプロブレムは右に訳出したといだろう。赤軍建設にかかわる主たるプロブレムは右に訳出したといだろう。赤軍建設にかかわる主たるプロブレムは右に訳出したといだろう。赤軍建設にかかかる主たるプロブレムは右に訳出したといだろう。赤軍建設にかかかり、大阪の教育、技術武装、ブジョンヌイの騎トロツキーはこのほか赤軍の教育、技術武装、ブジョンヌイの騎

\*(註)=今は手許にある一九一八年―二五年のボリシェヴィキ党員数を求められなければならぬが、それは他日にゆずらざるをえない。求められなければならぬが、それは他日にゆずらざるをえない。

九二五年	一九二四年	一九三三年	一九三二年	一九二一年	一九二〇年	一九一九年	一カーバ年
八〇〇、	四七〇、	四九〇、	五三〇、	小川0、	六一0、	三九〇、	三九C
000	000	000	000	000	000	000	000

(『党生活』誌一九六七年一九号所収)

粛清を反映している 右の数字は党員・党員候補の合計である。二二―二四年の減少は第一次

## 一条の稲妻のように

――クロンシュタット反乱の意味するもの

## 松田政男

(BBM通信・会員)

「思い出すのもいやだ。しあわせなんていうものは、天国にしかないと信じていた。当時からみると生活は百万倍もよくなった。この間、コーカサスのサナトリウムに行ってきた。飛行機から下を見たとき、ああ、自分はいま天国にいると感じた」――一九六七年十一月、ロシァ革命五十周年にあたるソ連各地の表情を伝える商業新間の報道のなかで、とりわけ私を腹立たしめたものは、ここに引いたような或る「オールド・ボルシェヴィキ」の言葉であった。ソ連はプロレタリアの《祖国》どころか《天国》にまで聖化されてしまったのである! 当年七十三歳になるサマルカンド在住の「人民芸術家」ウマル・ジュクラーノフがこのように語った時からわずか三はプロレタリアの《祖国》どころか《天国》にまで聖化されてしまったのである! 当年七十三歳になるサマルカンド在住の「人民芸術家」ウマル・ジュクラーノフがこのように語った時からわずか三のである。 当年七十三歳になるサマルカンド在住の「人民芸術家」ウマル・ジュクラーノフがこのように語った時からわずか三の間、一九六七年七月、おそらくはほぼ年齢も同じ位と思われる名も無い一人の老婆はデトロイトの街頭で絶叫する。「死ねば地獄だり」があるなんてウソだ。いま生きているこの場所こそが地獄だ!」があるなんてウソだ。いま生きているこの場所こそが地獄だ!」ないことにはいるというないます。

その黒い皮膚の内側に秘めているのであろうけれども、私たちは、に照された老婆の横顔は、ところで、この五十年間の屈辱と苦悩をそれこそ、天までをも焼き尽くさずにはおかぬほどに燃え上る焰

家の触覚し でなく、一人の「オールド・ボルシェヴィキ」の意識の襞の内奥に しまったところの触覚には到達し得ないのであろうか? リカ」の老婆の憤怒ー 値感を臆面もなく表出せしめてしまっているのである。「黒いアメ さえ滲透し切ってしまい、 る。そしてこの現実は、 ジョア先進国家の未革命という深刻な現実を発見する ことができ から発せられるところの憤怒は、ついに、 この《天国》と《地獄》との余りにも鮮かな コン トラストのなか 改めて確認するまでもなく、革命ロシアの驚くべき変質とブル -社会主義社会の繁栄と解放の《天国》の項で培われて - 資本主義社会の搾取と抑圧の《地獄》の底 単に、世界地図の上での確認であるばかり 露骨すぎるほど露骨な「一国主義」的価 「赤いソ連」の人民芸術

ロシア革命の五十年が世界革命の五十年で同時にあるとするならその起点を何処に定めるべきかという問題に直面する。こうして、速に形成せしめられてきたものであったとするならば、しからば、懸隔しているところの距離が、この五十年間に、徐々に、或いは急懸隔しているところの距離が、この五十年間に、徐々に、或いは急

つ重要な意味が私たちの前に登場してくる。

## \*

起したクロンシュタットの反乱は、いったい、ロシア革命において たちに一定の判断と選択を要求しているといえる。クロンシュタットは、その内容、その記述の質の良し悪しの如何にかかわらず、私 とができる。クロンシュタット反乱だけではなく、一九一八年から た、ダニエル・ゲランの『現代のアナキズム』も容易に手にするこ 著書のなかに引用符なしで記述されているといった事態が端的に示 いかなる位置を占めているのであろうか。 の西方三十キロ、バルチック海上に浮ぶコリント島の海軍要塞で蜂 ト反乱とマフノ運動、なかんずく革命ロシアの首都ペトログラード れてきた運動の総体についても、ヴォーリンとゲランのドキュメン 二一年にかけてのウクライナ農民の反乱、マフノ運動の名で伝えら ヴォーリンの『知られざる革命』を日本語で読むことができる。ま 埋没してきていたのであった。しかし、私たちは、今日、たとえば たった一行(!)でこの反乱を片付けてしまっている ことによっ し、さらに、トロッキーにいたっては、その厖大な自伝のなかで、 の片隅に記録されているわけではなく、わずかに、 反乱については、このレーニンの言葉自体がレーニン全集の何処か とレーニンをして評せしめた一九二一年三月のクロンシュタットの それは一条の稲妻の閃きのようにロシアの全事態を照し出した、 これまで、いわばロシァ革命の暗黒の部分として歴史の谷間に ドイッチャーの

「すべての権力をソヴィエトへ!」という明晰な革命のスローガ

たバルチック海を進んで総攻撃を加えたのであった。 任の下に、トハチェフスキーを指揮官とする赤軍が急行し、結氷し ト蜂起の報を聞くや全員一致でその鎮圧を決定し、トロッキーの責のなかで紛糾をつづけていたこの大会は、しかし、クロンシュタッ のなかで紛糾をつづけていたこの大会は、 て、さらに新経済政策をめぐって、レーニン、トロツキー、 する明らさまな反逆の烽火なのであった。労働組合の役割をめぐっでもなく、クロンシュタットの思想と実践は、ボルシェヴィキに対 彼らをひきあげるのに無力であることを暴露している」と断ずるま っている共産党は大衆との結合を忘れ、全般にわたる腐敗状態から ェスチャ』第一号(一九二一年三月三日付)の「宣言」が「国を牛耳 党大会を開いていた。したがって、臨時革命委員会機関紙『イズヴ 塞の全権を掌握した時、 冒頭に、一九二一年三月一日、十五項目にわたる決議を発表し、翌 は、完全な言論と行動の自由をもってなされること」という要求を ソヴィエトの再選挙を行なうこと。 ンを公然と掲げた最初の大衆的噴出である一九一七年七月のいわ めたクロンシュタットの水兵たちが、「ただちに秘密投票による る「七月デモ」をはじめ、終始ペトログラード・ソヴィエトの最先 トムスキーらそれぞれが自説を固執して譲らず、 ただちに臨時革命委員会を選出してクロンシュタット トロッキーをして「ロシア革命の誇りと栄光」と呼ばし ボルシェヴィキはペトログラードで第十回 労働者と農民の間での選挙運動 空前の論争 コロン 要

ロンシュタットの水兵・市民たち五万人は、投獄・流刑を含め、歴と虐殺が始まり、「ロシア革命の誇りと栄光」であったところのク撃、十八日にはクロンシュタット要塞は陥落する。翌十九日、処刑三月五日に最後通牒が 発 せら れ、七日に第一撃、十日に全面攻

史の舞台から一掃されつくしてしまうのである。

対立の一局面を構成するものとしてのみ考えがちである。遠い大正 意」を利用した「悪意」の実体であるところの反革命(!)の 革命の組織からの援助に集中した」とあるように、水兵たちの「善 軍兵士、水兵の協議会」の樹立が企図されている。 と」という項目があり、 述の三月一日の決議のなかには「すべての労働者、農民とアナキス る歴史を持ちつづけているのである。むろん、水兵たちがロシア国 てなのであったから、思えば、私たちの錯覚もまた、半世紀にわた かならぬ、このクロンシュタット反乱とマフノ運動の評価をめぐっの年代に、いわゆるアナ・ボル論争の重要な契機となったのが、ほ あることによって、ともすれば、この反乱が、ロシア革命における 大先達に始まって、ヴォーリン、ゲランに及ぶアナーキストたちで ローガンのもとにその秘密の目的を追求していた社会革命党員(エ れらの水兵たちは、ソヴィエトの新しい選挙という一見無邪気なス 「赤」と「黒」ー キズムのにおいをかぎつけることは容易であろう。たとえば、先 私たちは、今日、このクロンシュタット反乱やマフノ運動を擁護 と左翼社会主義諸政党に対する言論と出版の自由を 確立する こ さらに全世界へと発しつづけた無数のアピールのなかにアナ ……これらの水兵の背後では彼等は資本家政府や海外の反 アナーキスト、および帝政主義者の誘惑に身をゆだねたの コミンテルン執行委員会が発した声明の一節に、 明白に「アナーキスト」を含めているのであるから、 賞揚するものが、たとえば、大杉栄や石川三四郎らの -すなわち、ボルシェヴィズムとアナーキズムの 明確に「政党とは無関係」の「労働者、 さらにまた鎮圧 ۲..... 赤

しかしロシア革命以来五十年、余りにも多くのことを見つづけて概には責められるべき筋合いのものではないのかもしれぬ。たちの錯覚は、いわば歴史的に醸成されてしまった錯覚として、一

しかしロシア革命以来五十年、余りにも多くのことを見つづけてもた私たちは、革命と反革命の弁証法は、必ずしも、善玉と悪玉のタット反乱の持つ意味は、決して、善玉=ボルシェヴィキ対悪玉=クット反乱の持つ意味は、決して、善玉=ボルシェヴィキ対悪玉=アナーキストの対立にのみ収斂されるべきものではなく、むろん、アナーキストの対立にのみ収斂されるべきものではなく、むろん、アナーキスムの反革命性を、或いは、アナーキズムのそれを云々ルシェヴィズムの反革命性を、或いは、アナーキズムのそれを云々かったけの、これまでの常識的図式の一面性を脱却しなければならないのだ。

代の「最高の理論的意識」であるはずであるところのボルシェヴィ 真制のソヴィエトを要求して「直接行動」に決起した時、それは時 ろのなかに、やはり、問題の鍵はある。クロンシュタット 致する……かかる瞬間においては、時代について抱く最高の理論的 基本的力に押されて、 「歴史における高揚した 霊・感・ころの陸軍元帥(!)トロツキー う私たちの直面する課題を遠く激しく撃つ。弾圧の当事者であると 相剋と対応がはらむ一切の緊張関係をいかにとらえるべき れは、革命の過程における前衛と大衆、目的意識性と自然発生性の から発する直接行動とが一致融合する」と、見事に定式化したとこ も深い要求に勝利の表現を与える時に、はじめて、意識的表現と一 クロンシュタット あらゆる理論から最も縁遠い抑圧された大衆の最も深い層 の流血が私たちに訴えかけるものは何か? 社会的習慣のとびらを破り、 の瞬間」と呼んで、 が一九一七年十月の革命の瞬間を 歴史的発展の最 一大衆がその の大衆が か、と 13

まったのである。せず、「背離分裂」が現出した。「前衛」は「大衆」を絞殺してしせず、「背離分裂」が現出した。「前衛」は「大衆」を絞殺してしきの零線にいささかも触れることはなかった。「一致融合」は実現

しかしながら、大衆に乗り超えられてしまった前衛=ボルシェヴィキを、アナーキストたちが「大衆」の名において弾劾する時、それは、彼ら自身をも一つの罠に導いてしまっていることに気がついていない。ヴォーリンにせよ、ゲランにせよ、無数のドキュメント性を抽出し、さらに蜂起の大衆的性格を強調するために、「アナキストは、この事件ではほとんど何の役割も果していない」(ゲラン)とさえ言い切ってしまう時、ボルシェヴィキの公認史観と全く逆のとさえ言い切ってしまう時、ボルシェヴィキの公認中観と全く逆のとさえ言い切ってしまう時、ボルシェヴィキの公認中観と全く逆のように下でしまった。それでは、大衆に乗り超えられてしまった前衛=ボルシェヴストもまた、この錯覚の罠にがんじがらめになっているのである。

ことによって大衆と対立した。である。図式的にいうならば、ボルシェヴィキは外部がら力を持ち得ぬることによって大衆と対立し、アナーキストは内部で力を持ち得ぬることによって大衆と対立し、アナーキストは外部から力を加えることによって大衆と対立した。

源流となっている「赤」と「黒」の中間派コロンタイ女史の小説 における労働者反対派として、今日の「労働者の自主管理」思想の 3 思想を強いるべきではなく、労働大衆と同じ立場ですべての労働者声明書の倫理的誠実さにもかかわらず、たとえば「真の共産党員は げることができる。 向」の回路は二つの擬制の間にしか敷設されていなかったことをあ された首脳部の仕事」なしには「ソヴィエトに組織された大衆は、「赤」への「転向」も、結局のところ、「前衛の中から正式に選出 ンによって明るみに出されたヴィクトル・セル ジュ の「黒」 終らざるを得ない「脱信仰」告白にとどまっているのだ。またゲラ とともに進むべきなのである」(傍点引用者)といった空語の羅列に 録された「赤軍将校ヘルマン・カネイエフ」をはじめとする「数百 人」の規模にわたる無名の共産党員たちの「脱党」現象は、彼らの ィキの側へと「転向」する人びとが続出し、そしてその劣悪な「転 「信仰」告白の表明にしかすぎない。さらに、ボルシェヴィキ内部 《混沌としたさまざまな要望の中に射している知性の光をくらませ このことを如実に示すものとして、この反乱の期間に、 一九二一年」の第八章「戦いのなかのクロンシュタット」に記 ィキからアナーキストへ、また逆にアナーキストからボルシェヴ 人びとが立てる埃でしか》ないであろう」(傍点引用者)という 『知られざる革命』の第一部「クロンシュタッ 労働大衆と同じ立場ですべての労働者 「前衛の中から正式に選出いる」の「黒」から ボルシ

『赤い恋』は、一九二一年以降におけるソ連内部の急速な官僚化を でいるのである。

って、私は興味がない、と言い切っておこう。間質性を帯びてしまったのである。量の問題に関しては、正直にい同質性を帯びてしまったのである。量の問題に関しては、正直にいる許ら合う二つの革命の思想は、誤謬をさらけだすことによって、繰返して言おう。一九二一年三月、クロンシュタットにおいて前繰返して言おう。一九二一年三月、クロンシュタットにおいて前

\*

とができる。私たちは、革命ロシアの変質を先駆的=萌芽的に剔出とができる。私たちは、革命ロシアの変質を先駆的=萌芽的に剔出とができる。私たちは、革命ロシアの変質を失いりません。そほど、それは一条の稲妻のように全ロシア革命の勝利の栄光をロシアで共有したボルシェヴィズムとアナーキズムは、利の栄光をロシアで共有したボルシェヴィズムとアナーキズムは、利の栄光をロシアで共有したボルシェヴィズムとアナーキズムは、利の栄光をロシアで共有したボルシェヴィズムとアナーキズムは、利の栄光をロシアで共有したボルシェヴィズムとアナーキズムは、利の栄光をロシアで共有したボルシェヴィズムとアナーキズムは、利の栄光をロシアで共有したボルシュヴィズムとアナーキズムは、利の栄光をロシアで共有したボルシュヴィズムとアナーキズムは、利の栄光をロシアで共有したボルシュヴィズムとアナーキズムは、利の栄光をロシアの変質を先駆的=萌芽的に剔出をたどって前衛と大衆との間の緊張関係をとりもどすべく、《長征》をたどって前衛と大衆との間の緊張関係をとりもどすべく、《長征》をにどって前衛と大衆との間の緊張関係をとりもどすべく、《長征》と、後に対し、大い方に対した。

った。

立るのである。

立るのでは、まさに、ロシア革命五十周年における最初の《転機》なのであば、まさに、ロシア革命五十周年における最初の《転機》なのであば、まさに、ロシア革命五十周年における最初の《転機》なのであば、まさに、ロシア革命五十周年における最初の《転機》なのであば、まさに、ロシア革命五十周年における最初の《転機》なのである。

また、一九二一年には未発見の状態にあったのである。クロンシュ 革命の先進国(ロシアと西欧)と後進国(アジア、アフリカ、ラテンア まりつつある新しき「赤」と「黒」の時 索し行きつつあるといえるのである。自然発生性の新しき高揚は、 のであり、そして今日、帝国主義本国アメリカの心臓部に突き刺さ アにおける異質の革命の思想と実践のなかに初めて生かされて行く タットの《地獄》の教訓は、中国とキューバ、さらにはアルジェリ メリカ)との間にも架けられるべきものなのである。そして、これ にも空間的にも深化せざるを得ないところの永久革命の結び目を模 ったブラック・パワーの闘争に、世界革命の三つのファクター して自己を鍛え上げなければならないのである。 「帝国主義」圏、 そして、前衛と大衆との間で喪われてしまった回路は、同時に、 らつつある新しき「赤」と「黒」の時代のなかで、革命の主体と(しき目的意識性の抽出を不可避の課題とする。私たちは、いま始 「社会主義」圏、そして「第三世界」で、 時間的

「反」ロシア革命五十周年記念号として編集されるはずで、私もまた(1) 本号はロシア革命五十周年記念、或いは大沢正道風にいえば、

読者諸氏の御寛恕を乞いたい。 としての役割を担わしめる結果となった。一言お断りし、 た旧稿を増幅・補註して、未完稿「永久革命における現代」の序説 所載の、やはり「ロシア革命五十周年シリーズ」の一つとして書い 果すことを得ず、ここでは、『東北大学新聞』六七年十一月十日付 りであった。しかし、筆者の全く個人的な事情によってどうしても ゲバラにおける《流浪》の哲学の持つ意味について考えてみるつも ることによって「永久革命における現代」の相貌をさぐり、 ェ・ゲバラの思想と実践を、やはり「革命家の人間学」風に追跡す 記念(!)論文を執筆する予定であった。本誌創刊号(六六年十 るパウル・マルテル、ラテンアメリカ革命におけるエルネスト・チ スペイン革命におけるカミーロ・ベルネリ、ハンガリア革命におけ の半世紀の間に生と死を継起せしめた三人の革命家たち、すなわち、 と往還の構図のなかに定着させようとした試論にひきつづいて、こ 「革命思想における十九世紀と二十世紀」のかたちを、牢獄と亡命 ブランキ、 バクーニン、 マルクスおよびトロッキ 編集部と

- (2) ジュラクーノフの言葉は、『朝日新聞』六七年十一月二日付の特派員報告より、またデトロイトの老婆の言葉は、『世界革命運動特派員報告より、またデトロイトの老婆の言葉は、『世界革命運動り、それぞれ引用。

としては部分的に役に立つ。

- (4) 主として、野田茂徳の所論を念頭において、こう言っている。 な造語だが)の問題をも視野のうちにいれたすぐれた論稿であるな造語だが)の問題をも視野のうちにいれたすぐれた論稿であるが、あえて、論争を提起することとしたい。
- (5) 中国革命における≪長征≫の意味については、拙稿「流動する《根拠地≫の幻影」(『マルクス主義』一号、六七年一月刊)および「中国文化革命シンポジウム」(『東北大学新聞』六七年六月二十五「根拠地≫の対影」(『マルクス主義』一号、六七年一月刊)および
- (6) 再び言いわけめいて申しわけがないが、 いる。 をパリー 図は、未だ固執している。予告篇のみで、他日を期さねばならぬの べたところの問題意識を具体的に発展させるという壮大(!)な企 取せねばならぬはずである」(『自由連合』六七年三月一日付)と述 地革命の高揚のなかに……『世界永続革命』のたゆみなき前進を看 命の系譜に、今日、もう一つの系譜を重層させねばならぬと考えて とがあったが、この『敗北』に終らざるを得なかったヨーロッパ革 ンガリア革命に触れながら、「私はかつて世界革命の《埋れた系譜》 認識を媒介として、私なりの「第三世界」の発見過程― の《流浪の哲学》の延長線上にとらえ、フランツ・ファノンの世界 た。なかんずく、カーマイケルの理論と実践の持つ意味を、 ての歴史的思想的な展望を試みることに目標を設定しものであった 命における現代」は、この「新しき『赤』と『黒』の時代」につい まことに残念である。 北京一ハバナーアルジェの『勝利』としてつづいた戦後植民 -クロンシュタット―バルセロナ―ブダペストに措定したこ 実は、未完稿「永久革 前に、ハ ゲバラ